

第7回（平成27年度）「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式 「京都環境文化学術フォーラム」国際シンポジウム開催概要

1 日時

平成28年2月13日（土）

■「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式 午後1時～2時15分

■「京都環境文化学術フォーラム」国際シンポジウム 午後2時30分～5時

2 場所

国立京都国際会館 メインホール

3 内容

（1）「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式

デヴィッド・タカヨシ・スズキ氏（生物学者、環境活動家、ブリティッシュコロンビア大学名誉教授）、セヴァン・カリス=スズキ氏（環境・文化活動家、作家）、ハーマン・E・デイリー氏（メリーランド大学名誉教授）を第7回殿堂入り者として顕彰し、来日頂いたデヴィッド・タカヨシ・スズキ氏に認定証及び記念品を授与しました。殿堂入り者からは記念スピーチを頂戴しました（セヴァン・カリス=スズキ氏及びハーマン・E・デイリー氏はビデオメッセージ）。



会長式辞



認定証の授与



記念スピーチ



記念スピーチ（ビデオメッセージ）

(2) 国際シンポジウム

『世代を超えて、未来を守る』をテーマにシンポジウムを開催しました

ア 記念講演 デヴィッド・タカヨシ・スズキ 氏



ブリティッシュコロンビアでの森林保護活動の体験談を通じて、「空気、水、土などは人類が生きるための礎となるもので、絶対に守らなければならないものである。その前提の下、どのように人類が生きていくのかを考える必要がある。自然を自分たちに従わせ、国家や経済に資するよう強制しようとするのではなく、人間が編み出した物などを変更し、自然界や自然法に適応させるべきである」等、自然を守ることの大切さについて講演されました。

イ パネルディスカッション



〔パネリスト〕

デヴィッド・タカヨシ・スズキ 氏（殿堂入り者）

松尾 依里佳 氏（ヴァイオリニスト）

枝廣 淳子 氏（東京都市大学教授、幸せ経済社会研究所所長）

〔コーディネーター〕

井上 章一 氏（国際日本文化研究センター副所長）



松尾氏：最近、異常気象、暖冬や猛暑を実際に肌で感じるようになり、この地球が変わりつつあることを実感する事態が起きていると思っています。私たち一人一人の意識を高めて行動に移さなければならないとあらためて感じています。小さなことかもしれませんが、私は、洗剤は無添加でできるだけ自然に還りやすいような優しいものを使うということや、エアコンも推奨されている温度に設定し、買い物もなるべくエコバッグを持ち歩き、資源を無駄遣いしないように気を付けて過ごしています。また、お料理をするときも食材に感謝するという意味を込めて、大根やカブの葉っぱもおみそ汁に入れ、京都に根付く「始末の文化」を心掛けながら食材を大切に調理し頂いています。



枝廣氏：私自身、今、本当に持続可能で幸せな社会のために必要なことが少なくとも二つあると思っています。一つは、広く伝えて行動を変えていく、それを促していくことです。セヴァンさんは、まさにそういう活動をされてきた方です。12歳のときの伝説のスピーチを皆さんもご存じだと思いますが、その後大人になっても、本当に素晴らしい、人々の価値観にいろいろな思いを伝えていく、行動変容につなげていく、そして変わっていく人々を増やしていく、そういう活動をあちこちで展開されています。もう一つは、問題の本当の構造、本当の問題は何かに切り込んでいくことです。もともと地球の大きさは決まっています、その地球上で人間の影響がどんどん大きくなってきた。今、人間の活動を支えるために、1.5個必要になっているといわれています。

多くの人が、GDPが成長すればお給料が上がる、みんなが豊かになる、いい世界になる、幸せになれると思っています。けれど豊かになれば、それ以上の成長は、もしかしたらプラスよりもマイナスの方が大きくなるのではないかと。これはハーマン・デイリーさんが言っている、「経済成長は既に不経済成長になっている」、経済的ではない、不経済になっているということです。また、「途上国では経済成長は必要だろう。しかし、先進国では、経済成長することのプラスよりもマイナスの方がもう大きくなっている。だとしたら、この辺で経済成長をやめて、経済の大きさ自体は変わらない、いわゆる定常経済に変わっていくべきではないか。」とも言っています。

ハーマン・デイリーの三原則だけでなく、もう一つハーマンさんの大きな貢献は、ハーマン・デ

イリーのピラミッドという考え方です。私たちは経済だけを見て効率化を考えていますが、資源やエネルギーはもともと自然資本から来ている。車を作るにしても、それが最終目的ではなくて、究極の目的は幸せのはずだとしたら、自然資本から幸せまでを一気通貫で考える、そういった効率を考えるべきではないか。こういったことをハーマンさんは考えています。



井上氏：昔の家に、例えば北山杉の床の間の床柱がありました。昔の普請道楽をする方は、木にすごくこだわって木の香りを楽しんだと思いますが、今そういう楽しみは事実上なくなって、量産化される材木でこしらえられる家屋に住んでしまっています。木に対するフェティッシュな思いを残す人はほとんどいなくなってしまっています。枝廣さんはこういうことをどう考えられますか。

を聞いたりします。ですので、特に手触りとか、感覚的な香りとか、これは本当に小さいときからのものだと思うので、子どもたちにどういう環境を提供するのか。そういったことはとても大事なと思います。

井上氏：自然な木を使うとシロアリが出てくるとか、クイムシが出てくるといった問題があります。私たちの材木がホルムアルデヒドをしばしば使うのもそのせいですね。うちの近所は川があり、小さな木々があって、環境に非常に優しいところなのですが、おかげでよく虫が出ます。木々の並ぶ景観を守っている行政は、住民の苦情に応じて、虫退治の薬を年に2~3回まきます。こういうことは地球に優しいと考えたらいいのか、スズキさん、どうなのでしょう。



スズキ氏：どれもこれも全て自然を構成する一部だと考えています。そういったものと共生する方法を見つけるべきであって、殺虫剤の使用などは私に言わせれば愚の愚です。虫というのはこの世で最大数を誇る最も重要な動物群なのです。人間一人に対し、虫数十億匹と言われていました。数だけでなく、色々な意味で非常に重要な存在で、他の生物に食糧を提供したり、他の虫の数を抑制したりします。農場に1~2種の害虫がいるからといって、化学薬品をスプレーして全ての虫を殺してしまうという考えは、全く馬鹿げています。「京都で犯罪が起きた。犯罪撲滅のために京都市民を皆殺しにしよう」と言うことと同じです。しかし人間はそうとは考えずに自然を相手に宣戦布告し、強力殺虫剤で虫を全滅させようとしています。自然はどのようにこれらの害虫、別の捕食動物を抑制しているか。人類はもっと自然に敬意を払い、自然がしている方法から学ばなくてはなりません。

井上氏：デヴィッドさんが記念講演でおっしゃった先住民の考え方について、「山を材木資源の宝庫だとは見ない。神様の宿るところだと見る」とおっしゃいました。こういう考え方に近いものは、日本にも伝統的にあると思います。例えば、この施設をつくる際、工事が始まる時には、私たちは神主を招いて、地の霊が騒がないための儀式をします。つまり、工事をするときには地面に杭を打ったりして、地面の下に住む神様が怒るかもしれないので、「怒らないようにね」と言っておはらいをします。こういう考え方を一般にキリスト教の方は「未開人の考え方だ」と捉えやすいと思いますが、デヴィッドさんはそうではなく、「この近代社会にあって、いい考え方を日本人は持っているね」と思ってくださいませでしょうか。

スズキ氏：もちろんそう思います。聖書を礎とするキリスト教の考え方では、土地は私たちに与えられたものであり、「産めよ、増えよ、地に満ちてそれを従わせよ」という詞の対象となるものです。すなわち土地を支配し、自分たちのために使えと聖書では教えています。地球にとっては非常に破壊的な教えです。敬うという感情は非常に重要だと私は考えています。

枝廣氏：人間も動物も生きとし生けるもの、そしてこの世代だけではなくて、過去、未来、みんな同じだし、みんなつながっているのだという感覚を、私は日本や東洋の人は西洋の人よりも強く持っているし、そこが本当の意味での環境問題を解決する上での鍵の一つではないかと思っています。西洋でも、環境問題を本当に何とかしようと思っている人の中には、「西洋型の考え方にはもう答えがないと思う。なので、東洋に答えを探しに来る」と言って、例えば禅の勉強をすとか、インドに入って仏教の勉強をすとか、そういう人たちも結構います。東洋には東洋のいいもの、きつ

と西洋には西洋のいいものがある、どちらが良い、悪いというのではないけれど、それをもう少し統合した形で、東洋のいいものもきちんと西洋に伝えて、価値観やライフスタイルということと言いつつ、世界をどう捉えるか、それはデヴィッドさんが先ほどからおっしゃっていることですが、きつと新しい捉え方をつくるのが、今の私たちの課題なのではないかと思ひます。

スズキ氏：カトリックには同意しかねる教えがたくさんありますが、フランシスコ教皇にはそのおみ足に接吻したいほどです。回勅「ラウダート・シ」は、これまで私が読んだ文書の中で最も素晴らしい物の一つです。私たちは問題を分野ごとに分けて考えがちですが、ラウダート・シでは、全てを取り上げ、それぞれが全体の一部であり、互いにつながっているのだということが述べられています。社会正義、飢餓、貧困、環境劣化など、それぞれバラバラに捉えるのではなく、一つの問題を構成する部分として捉え、全体としての大きな問題に立ち向かわなくてはならないと述べられているのです。

松尾氏：デヴィッドさんがおっしゃった、「環境と貧困も一つの問題だ」ということがすごく気に掛かっています。というのは、環境を守ろうと思うとお金がかかるというのが、消費者としての率直な印象だからです。自然に優しい洗剤、そういったものは、時に高かったりするのです。もっとたくさん安い洗剤がある中で、自然派のオーガニックなもの、環境に優しいものにはコストが掛かります。農薬のかかっている無農薬の野菜を買おうと思っても、それも高いのです。健康にいいもの、体にいいもの、そして自然にとって、環境にとっていいものを買うと、やはりお金が掛かってくる。経済活動を追求するというのと、ちょっと矛盾してしまうようなところが、個人の問題として起きてくる。

井上氏：難しい問題で、多分、無農薬野菜は、八百屋さんやスーパーで売っている野菜の1.3倍ぐらいまでなら買える。つまり、1.3倍ぐらいなら思想を買う消費者がいると思うのですが、1.5倍になると、だいぶ売り上げは落ちるでしょうね。こういうことを含めた経済学を、どなたかに構築していただければいいのかなとは思ひます。

スズキ氏：農業が工業化される前、食糧は全てオーガニックでした。農薬不使用食品の方が値段が高いというのは奇妙なことです。農薬を使用した食品の方が高額だというならわかりますが。そうならばそんな物を買う人は無くなるでしょう。悪かろう安かろうを実践しているのが近代農業です。食糧システム自体、本当に馬鹿げています。変えるべきです。カナダの食卓には、メキシコや米国南部から平均3,000kmもの旅路を経た食品が食卓に上がっています。それでも国内の有機栽培食品より安価なのです。このような近代農業での価格はあるべき真の価格ではありません。

枝廣氏：今、デヴィッドさんがフードマイレージの話をされました。ちなみに日本は8,500kmです。カナダの3倍ぐらいのフードマイレージで、地球の裏側からたくさんものを運んできているのが現実です。有機栽培など、環境にいいものがそうではないものよりも高いのは確かにそうだと思うのです。今の経済の仕組みの中で、有機栽培や無農薬のものを買おうと思うと、どうしてもペナルティ的に高くなってしまふのですが、今、私がそのことに関して希望を持っているのは、CSAという動きが世界でも日本でも広がっていることです。CSAはCommunity Supported Agricultureの略で、地域、コミュニティがその農家と最初から契約をしてサポートして、例えば年間契約をして最初に幾ら払うと決めてしまふのです。農家はちゃんと買ってくれることが分かっているので、安心して無農薬で虫食いの野菜でも作ることができます。そのようにやることで農家は安心して有機栽培、無農薬栽培ができるし、消費者も最初から顔の見える関係で、「この人が作るのだったら」と言いつつ、安心してお金を渡して安全なものを食べられます。

松尾氏：外食産業でも、キャベツなど、スーパーでは高くなっている野菜がある一方で、一定価格で仕入れる契約をして、価格を変動させない企業努力をされている企業を経済番組などで拝見して、素晴らしいなと思ひました。本当に安全なものを買うためには、高ければいいというものではないけれど、しかるべき対価、環境にとって支払わなければいけない絶対的なコストは払う必要があると思ひます。私たち消費者が、その企業がどういう取り組みをしているか、企業の活動に関心が高く持つて選んでいくことが、結果的にそういう企業を増やすような要因になっていくのではないかと思ひます。

井上氏：神主がおはらいした後は、どんな工事でもできるというように先ほど申し上げてしまひましたが、こういう集いでも「ああ、いい話を聞いた。さあ、明日からコンクリート打ちや」というように、ありがたい話を聞いたことが免罪符になってしまう可能性があります。特に、わが民族にその傾向は強いように私は感じています。私たちはそう大きいことはできないと思ひますが、自分たちにできる範囲で小さいところから私たちの環境のことを考えていくようにしたいと思ひますし、思おうではありませんか。